

問題が生まれる構造を 理解し、考え、行動 できる人材を育てる

近年、教育・研究に並ぶ3つめの大学の機能として社会貢献の重要性が強調されている。大学が社会貢献を行う意義は、大学が持つ多様な知的資源を生かした取り組みができる点にある。また貢献活動を通じて学生を育てる意味もあり、多くの大学が国際貢献や地域貢献を使命として掲げ、途上国を含む国内外での教育支援や地域の産業振興などを行っている。社会貢献活動を通じて社会の矛盾を体験し、自分は何ができるのかを考え実践した学生は、企業の一員となっても自分の仕事に社会的意義を求めるといわれる。

今回我々は早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）を取材した。そこで見たのは、社会を少しでも良くしようとボランティアに励む学生たちだ。その姿を知ることは、若手社員の教育の在り方を考える契機となるだろう。

*1 全学共通科目。学部や学年に関係なく履修することが可能で、単位は卒業単位に加算できる。

*2 ジェンダー問題とは男女の生物学的性差ではなく、社会的価値観や文化的背景などによる社会的性差が生み出す問題のこと。

「学ぶ」と「取り組む」の往還で 社会に貢献できる人材を育成

早稲田大学 平山郁夫記念ボランティアセンター
(WAVOC)



兵藤智佳氏
平山郁夫記念
ボランティアセンター
(WAVOC) 助教

W WAVOCは、「社会に貢献できる人材を育てる」という早稲田大学の教旨のもと、学生が主体となるボランティアプロジェクトを応援する機関である。「ボランティアのニーズに応じて学生を派遣する“マッチング”は主たる目的ではありません。学生たちが世の中の課題を見つけてくることから始め、プロジェクトの進行を支援します。ボランティアを通じて学生を育てることが目的です」とWAVOC・助教の兵藤智佳氏は語る。

その仕組みは、「社会に働きかけたいが何をすればいいかわからない」という学生に「学ぶ」と「取り組む」を往還させるというもの（図1参照）。「学ぶ」とは、WAVOCがオープン科目*1に提供しているボランティア関連の科目、そして「取り組む」とは、33件のボランティアプロジェクトのことを指す。授業で獲得した学術的な知識をプロジェクトの体験につなげ、その体験をまた知識で裏付ける。

一例を挙げよう。「グローバルヘルス」というオープン科目では、HIV、ドメスティック・バイオレンス（DV）などジェンダー問題*2に関するテーマを1つ選択し、「社会が生み出した現象」として理解を深めるとともに、社会啓発の実践に必要な知識を“学ぶ”。この授業を履修した数名の学生が「コミュニティエイズプロジェクト（CAP）」や「DVほっとプロジェクト」などの人権問題のプロジェクトに“取り組む”。CAPではフィリピンの従軍慰安婦の支援を行い、そこから見えてきた差別を学生たちがドキュメンタリー映像にして放映している。また、「DVほっとプロジェクト」では、「誰もがほっとできる社会」の実現を目指し、DV被害者親子キャンプに参加して考えたことを報告書にして発信している。「プロジェクトで大切にしているのが体験を言語化する“振り返り”という作業です。自分の体験を語る機会を何度も持つことで、悲しみや憤りという自分の感情の表現から、支援した人を取り巻く社会を変えるための表現に変わっていきます。『誰かが悪いから』という思考ではなく、社会を制約している制度や観念が差別や偏見を作り出し、その社会に自分も加担していることを知るのです」（兵藤氏）

毎週のミーティング、見知らぬ土地での活動など、その大変さに途中でやめる学生も多い。だが、4年間続けた学生は、社会のなかでの自分の位置を見つめ、やがて法制度や社会システムの問題に目が向くという。

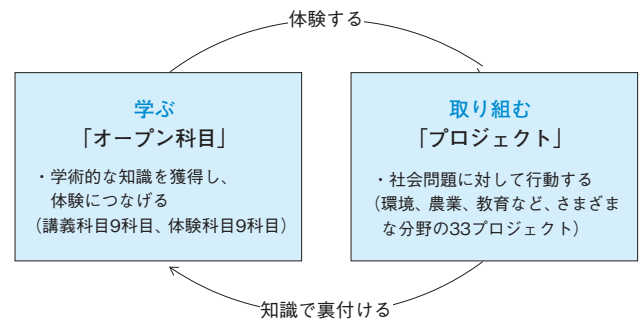
社会を良くしたいと願う学生たち。彼らが社員となったとき、企業は彼らが担当する仕事の持つ社会的意義を示すことができるだろうか。

早稲田大学

平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC)

- 設立：平山郁夫氏の世界平和への思いを受け継ぎ、2002年に設立。理念は、①社会と大学をつなぐ ②学生が体験的に学ぶ機会を広く提供する ③学生が社会に貢献することを応援する
- 育成の目標：①問題を社会の仕組みのなかに位置づける力 ②想像力、共感する力 ③企画・立案・運営する力 ④自分の生き方を他者との関わりの中で紡ぎ出す力
- 参加人数：設立10年目をむかえ、参加人数は延べ10万人を超える。「現在、定期のミーティングに参加しているのは約300人。2011年度に1回でもミーティングやイベントに参加した学生を含めると2000人はいます」と兵藤氏。
- 卒業後の進路：WAVOCの活動に参加した学生の多くは、一般企業に就職する。業種では、マスコミ関連も多く「社会問題に対して自分の意見を発信したくなる」（兵藤氏）ことが要因の1つだと考えられる。社会貢献の体験を生かして、自分で農業を始めた学生や、新潟の酒蔵に就職した学生もいる。公務員になる学生も多い。

◆図1 正課と課外の往還



WAVOCでは、活動場所や活動分野を連動させた正課科目（オープン科目）と課外のボランティアプロジェクトによって、長期にわたって学生が社会貢献活動に関われる仕組みになっている。

出典：WAVOC作成の図をもとに編集部作成

参加する学生たちも意欲的だ。「オープン科目のなかでもフィールドワークができる授業は少ないため、この科目は人気です」（商学部2年生女子）。「もともとジェンダー問題に興味がありました。大学生最後の年に、自分の視点で学びたいと思ってこの授業を履修しました」（政治経済学部4年生女子）

オープン科目の後期科目「グローバルヘルス」講義風景。「グローバルヘルス」では、「HIV陽性者に対する偏見」や「同性愛者の権利」など、学生が自分たちで立てた問いをテーマに研究プロジェクトを立ち上げ、そこから社会を変えるためのメッセージを発信する。授業では、学生50人が4チームに分かれてグループワークを行い、社会的に弱い立場に置かれる人の視点から「私たちの社会はどうあるべきなのか」について、半年間にわたってデータを集め、議論を重ねた

後期講義最終日に当たるこの日は、半年間の成果が発表された。写真は「DV被害者」をテーマにした研究の発表。DVというプライベートな問題に、第三者が介入すべきかが議論の中心となった。ほか3チームのテーマは「同性愛者」「被曝者」「在日フィリピン人」。差別や偏見のない社会のために何ができるのか。学生たちの真剣なメッセージが伝わる

プロジェクトの活動は、①メンバーと企画を練る ②現地活動する ③活動を社会に向けて発信する、という流れで進む。実際に社会に働きかけることが目的のため、発信にはとくに力を入れており、報告書の提出が義務付けられているほか、成果発表会や冊子を作成して配布するなどさまざまな形で行われる

プロジェクトのリーダーは学生たちが自ら選ぶ。リーダーたちに共通している点は、物事の表層だけを見るのではなく深く考えるタイプで、分析力や考察力も併せ持っていること。「明るい」「盛り上げ方がうまい」ということではなく、長く活動を続けていくために、自分たちに必要なリーダーシップを持った人材を学生たちが見極める

「海外ボランティアリーダー養成プロジェクト」：ボルネオ島（マレーシア）で子どもたちとのゴミ拾い。経済成長の目覚ましいマレーシアでは、フィリピン人移民が増え続け、貧困や差別といった社会問題を生み出している。マレーシア国民の移民問題への関心を高めるために、まずはプロジェクトの活動に興味を持ってもらおうと「ゴミ問題の改善」という身近なテーマから活動をしている

「ハンセン病問題支援」：中国のハンセン病快復村で快復者と交流している様子。学生はハンセン病がもたらす「孤独」にじかに触れ、人間は一人では生きていけないことを実感するという

